

ベレー帽

能村 研三

俳句を寝かせる

「俳句は寝かしたほうが良い」とよく言われる。しかし、ひと月の何回もの句会に出句するにはそんな悠長なことは言っていられない。

締め切りギリギリになって作っている俳句ではろくなものにならないのは明白である。

本来なら、句を作って最低二日以上寝かせてみる必要があるのかも知れない。作ったばかりの句であると、まだ自分が作り手の目線のままで読んでしまつて、客観的な視点で見ることが出来ないからだろう。

たとえば、眠気が覚めて一晩中さんざん考え尽くした句が翌日になつて読み返すと、恥ずかしくて情けなくなることもある。これは、句を読み返しているときには、作っていたときの高揚感が無くなっているからなのだ。

自分の作った句を今度は「読み手」として、客観的に読み返してみるこ

とが必要なのだろう。

かつてこの欄で「俳句醸造法」という文章を書いたことがあったが、ときどき、糠床に手を入れて、かき回しながら、発酵、熟成させることが出来る余裕を持ちたいものだ。

吟行などで、素材に対して記憶が鮮明なうちに、ノートに書きとめるが、登四郎は吟行の時も殆ど句帳を持たなかった。「見たものや風景を頭の中に刻みつけて帰り、二、三日してから思い出して作る。だから見た瞬間句になったと言う例は少ない」(「素材より表現」と言っている。

「推敲」という言葉があるが、作り手の自分を一端離れて、一人の読み手となつて句を読んでみることが必要なのだと思う。

今年こそ、少し余裕をもって「俳句を寝かせる」ような句作りに専念出来ればうれしいのだが。

年の夜の余りし墨を地に吸はせ
翼張る海鷗十字の淑気かな
風花や火色の欲しきわが詩囊
端正な孟宗の節淑気満つ
春隣師系はなべてベレー帽
検眼表上・下・右と春を待つ

能村 研三